

二〇一〇年度・学力検査問題【国語】

(中学第一回)

注 意

- 一、試験時間は50分です。
- 二、答えはすべて解答用紙にはつきりと記入しなさい。
- 三、解答用紙のみ試験終了後あつめます。
- 四、問題は9ページで□・□・□の三題あります。開始の合図で必ず確認し、そろっていない場合にはすぐに手をあげなさい。

次の文章を読んで後の問いに答えなさい。なお、作問の都合上、省略した部分・表記を改めた部分があります。

いい成績ではなかったが、私はその春、中学校へ受験して合格をした。私は、新しい袴と黒い沓下とあみあげの靴をはき、いままでの毛布をよして羅紗のマントを洒落者らしくボタンをかけずに前をあけたまま羽織って、その海のある小都会へ出た。そして私のうちと遠い親戚にあたるそのまの呉服店で旅装を解いた。入口にちぎれた古いのれんをさげてあるその家へ、私はずっと世話になることになっていたのである。

私は何ごとにも有頂天になり易い性質を持っているが、入学当時は銭湯へ行くのにも学校の制帽を被り、袴をつけた。そんな私の姿が往來の窓硝子にでも映ると、私は笑いながらそれへ軽く会釈をしたものである。

それなのに、学校はちつとも面白くなかった。校舎は、まちははずれにあつて、しろいペンキで塗られ、すぐ裏は海峡に面したひらたい公園で、浪の音や松のざわめきが授業中でも聞えて来て、廊下も広く教室の天井も高く、私はすべてにいい感じを受けたのだが、そこにいる教師たちは私をひどく迫害したのである。

私は入学式の日から、ある体操の教師にぶたれた。私が生意気だといふのであつた。この教師は入学試験のとき私の口答試験の係りであつたが、お父さんがなくなつてよく勉強もできなかったらう、と私に情ふかい言葉をかけてくれ、私もうなだれて見せたその人であつた

も、教科書の一字一句をそのまま暗記してしまうように努めた。これは私のいちかばちかの潔癖から来ているのであろうが、この勉強法は私の為によくない結果を呼んだ。私は勉強が窮屈でならなかったし、試験の際も、融通がきかなくて、殆ど完璧に近いよい答案を作ることあれば、つまらぬ一字一句につまずいて、思索が乱れ、ただ意味もなしに答案用紙を汚している場合もあったのである。

しかし私の第一学期の成績はクラスの三番であつた。操行も甲であつた。落第の懸念に苦しまされていた私は、その通告簿を片手に握つて、もう一方の手で靴を吊り下げたまま、裏の海岸まではだして走つた。嬉しかったのである。

一学期をおえて、はじめての帰郷のときは、私は故郷の弟たちに私の中学生生活の短い経験を出来るだけ輝かしく説明したく思つて、私とその三四ヵ月間身につけたすべてのもの、座蒲団のはてまで行李につめた。

馬車にゆられながら隣村の森を抜けると、幾里四方もの青田の海が展開して、その青田の果てるあたりに私のうちの赤い大屋根が聳えていた。私はそれを眺めて十年も見ない気がした。

私はその休暇のひとつきほど得意な気持でいたことがない。私は弟たちへ中学校のことを誇張して夢のように物語った。その小都会の有様をも、つとめて幻妖に物語つたのである。

だけに、私のころはいつそう傷つけられた。そのちも私は色んな教師にぶたれた。にやにやしていると、あくびをしたとか、さまざま理由から罰せられた。授業中に私のあくびが大きいので職員室で評判である、とも言われた。私はそんなばかげたことを話し合っている職員室を、おかしく思つた。

私と同じ町から来ている一人の生徒が、ある日、私を校庭の砂山の陰に呼んで、君の態度はじつさい生意気そうに見える、あんなに殴られてばかりいると落第するにちがいない、と忠告してくれた。私は愕然とした。その日の放課後、私は海岸づたいにひとり家路を急いだ。靴底を浪になめられつつ溜息をついて歩いた。洋服の袖で額の汗を拭いていたら、鼠色のびっくりするほど大きい帆がすぐ眼の前をよるよるとおつて行つた。

私は散りかけている花卉であつた。すこしの風にもふるえおののいた。人からどんな些細なさげすみを受けても死ななかなと悶えた。私は、自分を今にきつとえらくなるものと思つていたし、英雄としての名誉をまもつて、たとい大人の侮りにでも容赦できなかったのであるから、この落第という不名誉も、それだけ致命的であつたのである。その後の私は競競として授業を受けた。授業を受けながらも、この教室のなかには眼に見えぬ百人の敵がいるのだと考えて、少しも油断をしなかった。朝、学校へ出がけしなには、私の机の上へトランプを並べて、その日いちにちの運命を占つた。ハートは大吉であつた。ダイヤは半吉、クラブは半凶、スペードは大凶であつた。そしてその頃は、来る日も来る日もスペードばかり出たのである。

それから間もなく試験が来たけれど、私は博物でも地理でも修身で

たせ、もんしろ蝶やバッタを追いつながら一日を夏の野原で過した。夜は庭園で焚火をめらめらと燃やして、飛んで来るたくさんの中を網や箒で片っぱしからたたき落した。末の兄は美術学校の塑像科へ入つていたが、まいにち中庭の大きい栗の木の下で粘土をいじくつていた。

もう女学校を卒業していた私のすぐの姉の胸像を作っていたのである。私もまたその傍で、姉の顔を幾枚もスケッチして、兄とお互いの出来上り案配をけなし合つた。姉は真面目に私たちのモデルになつていて、そんな場合おにも私の水彩画の方の肩を持つた。この兄は若いときはみんな天才だ、などと言つて、私のあらゆる才能をばかにしていた。私の文章をさえ、小学校の綴方、と言つて嘲つていた。私もその当時は、兄の芸術的な力をあからさまに軽蔑していたのである。

ある晩、その兄が私の寝ているところへ来て、治、珍動物だよ、と声を低くして言いながら、しゃがんで蚊帳の下から鼻紙に軽く包んだものをそつと入れて寄こした。兄は、私が珍らしい昆虫を集めているのを知つていたのだ。包の中では、かさかさとした虫のものがく足音がしていた。私は、そのかすかな音に、肉親の情を知らされた。私が手暴くその小さい紙包をほどくと、兄は、逃げるぜえ、そら、そら、と息をつめるようにして言つた。見ると普通のくわがたむしであつた。私はその鞘翅類をも私の採取した珍昆虫十種のうちにいれて教師へ出した。

(太宰治「思ひ出」『太宰治全集2』筑摩書房より)

※1 新しい袴・制帽を被り：「袴」「沓下」「あみあげの靴」「羅紗のマント」「制帽」いずれも当時の中学生の正装。

※2 競競として：びくびくして。

※3 博物でも地理でも「操行も甲であった」「博物」「地理」「修身」「操行」いずれも当時の中学の授業科目。とりわけ「操行」は授業の取り組みや日頃の態度を重視して通告簿（成績表）がつけられた。成績は、優れた順に「甲・乙・丙・丁」でつけられていた。

※4 行李：旅の荷物を収納する箱。

※5 幾里四方もの：「里」は距離の単位。一里は約四キロメートル。

※6 幻妖に物語った：不思議めかして話した。

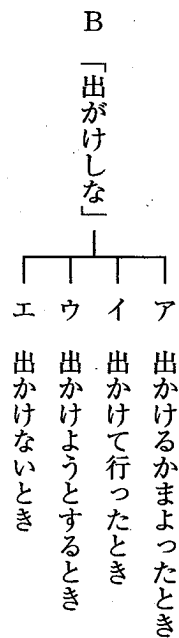
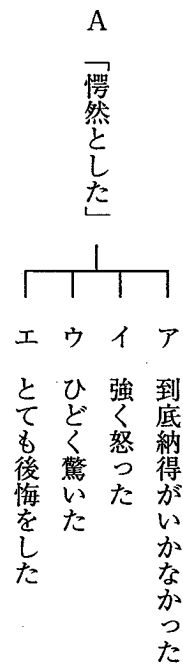
※7 塑像科：美術学校の学科のひとつで、彫刻の勉強をする。

※8 綴方：小学校の授業科目のひとつ。

※9 蚊帳：蚊を防ぐために寝床をおおうすい布製のテントのようなもの。

※10 鞘翅類：かたい羽をもった昆虫の総称。

問一——線A「愕然とした」・B「出がけしな」の文脈上の意味として最も適当なものを次の中からそれぞれ選び、記号で答えなさい。



問二——線1「中学へ受験して合格した」とありますが、この時の「私」の心情として、最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア 親もとから離れて生活することで、一気に大人になったような気分になり自信満々になっている。
- イ 中学校に合格したことは大きな喜びであったが、同時に都会の学校になじめるか半信半疑でいる。
- ウ 田舎者と馬鹿にされぬよう身なりや行動に気を配り、都会の中学生らしくなろうと無我夢中でいる。
- エ 中学生になったことへの喜びやこれから始まる中学校生活を期待して意気揚々としている。

問三——線2「学校はちつとも面白くなかった」とありますが、その理由として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア 入学前の気持ちなどはあまり長続きせず、単調な生活の中で目標を見つけ出せず退屈だったから。
- イ 学校の雰囲気は気に入っているものの、教師たちからいわれのない暴力をたびたび受けたから。
- ウ 勉強が想像以上に難しく、進級できないかもしれないことにおびえる生活をしなければならなくなったから。
- エ 自分は優等生であるという自負が打ちくだかれ、毎日自分の実力のなさを突きつけられる生活だったから。

問四——線3「私もうなだれて見せた」とありますが、その説明として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア 相手の優しさにふれて、日ごろ我慢していたさびしさが思わずこみ上げてしまった。
- イ 相手の優しさに感激して、改めて中学に進学するための努力を誓った。
- ウ 相手の偽りの優しさを見抜いた上で、合格するためにあえてだまされたふりをした。
- エ 相手の優しい気づかいに合わせて、自分も悲しい気持ちでいることを装った。

問五——線4「おかしく思った」とありますが、その理由として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア 人にものを教える人たちが、あまりに次元の低い会話をしているの、その言動がおろかに思えたから。
- イ 正しいことを教育する立場の教師たちが、どうして道理にあわないことをするのか疑問を抱いたから。
- ウ 私への暴力は明らかに間違った行為なのに職員室ではそれがとがめられないことを不満に感じたから。
- エ 自分が真面目に学校生活を過ごしているにもかかわらず、落第させられることが納得できなかったから。

問六——線5「鼠色のびっくりするほど大きい帆」とは、何をたとえたのですか。最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア 自分の味方が誰もいないという深い孤独感。
- イ 試験が好成绩なら大丈夫だという淡い期待感。
- ウ 落第するのではないかと強い不安感。
- エ 教師という強者に何も抵抗できない無力感。

問七 線6「嬉しかったのである」とありますが、これまでの「私」の気持ちの説明として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 入学当初のうわついていた態度が、自分の進級を危うくしていることを友人から知らされ、それまでの行動を後悔し、反省をしたが、試験に關しての準備は間に合わず、とりあえずできるだけの努力をして受験をした。結果については満足のいかないものではあったが、ひとまず乗り切れたことを喜んでいる。

イ 入学当初の状況をわきまえない自信に満ちた行動が、教師たちの怒りをかい、進級をさせてもらえないのではないかと友人の忠告を受けた。それを、見返してやろうと試験に取り組んだが失敗して、落第させられると覚悟していたところ、良い成績を修めていたことがわかり、ひとまず安心をして喜んでいる。

ウ 入学当初から都会の生徒たちには負けるはずがないと自信を抱いていたが、実際は進級が危ういほどの状況だったことを知り、必死に試験の準備をしていた。その準備にも自信が持てずにいたものの、努力が実りよい成績をおさめることができ、落第はまぬがれたので、胸を張って故郷に戻る喜びを抱いている。

エ 入学当初は合格できた喜びとこれからの期待とでうかれていたが、教師の仕打ちと友人からの忠告で自分が進級できないかもしれないと不安を抱きはじめた。そのような中でのぞ

二

次の文章を読んで後の問いに答えなさい。なお、作問の都合上、省略した部分・表記を改めた部分があります。

ふれる以外の五感をあらわすことばは、いずれも対象を示す助詞として〈を〉をとる。たとえば色を見る、音を聞く、臭いを嗅ぐ、甘さを味わうといったぐあいである。

※₁ 坂部恵氏の指摘だが、たしかにそうだ。わたしたちは「机をふれる」とはけつて言わないで、机に「ふれる」と言う。他の四つの感覚との間で、この触覚に特別なものを感じているあらわれと言つてよいのだろう。

たとえば、「その映画を見た」と言わずに「その映画に触れた」と言うとき、あるいは「その音楽を聞いた」と言わずに「その音楽に触れた」と言うとき、感覚の世界ではそこに小さくない違いを感じて、そこを言いあらわそうとしている。

まず、対象との関係が〈見る〉〈聞く〉などでははっきりしている。見たり聞いたりするのは、自分の向こうにあり、それを見たり聞いたり、嗅いだり味わったりする。

〈触れる〉にも対象がある。A、触れるとはその対象と自分の手が接触することだ。B、右手で左手に触れるとする。このときどちらがどちらに触れていることになるのだろうか。左手を動かさず右手を動かして左手に触れたから、つまり右手に能動性を与えたから、触れるのは右手であり触れられるのは左手だと考えがちだが、そう言

んだ試験は必ずしも万全のできとはいえなかったものの、思いがけない好成绩であったため、それまで学校生活に対して抱いていた不安が消え去り、喜びにあふれている。

問八 本文の表現の特徴についての説明として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 地方の小都市という舞台設定を具体的な情景で描き、主人公がその狭さのために苦しんでいる様子を強調している。

イ 場面ごとの状況とそれに対する心情変化を、主人公の「私」という視点から丁寧に描いている。

ウ 学校と家庭という対照的な環境を比較して描くことで、家族の大切さというテーマを浮き立たせている。

エ 時間的な展開を軸に物語を進めることで、「私」が人間不信になっていく様子を描こうとしている。

いされるだろうか。右手は左手に触れられているとも言えるのだ。

※₂ 〈に〉は能動にも受動にも使うことができる。左手に触れる、左手に触れられる。〈を〉はそうはいかない、能動の助詞だ。C、対象がものの場合、たとえばコップに触れられるとは思わないし、そういう言葉づかいはしない。しかし、感觸の中では、能動と受動の小さな事件が起こつてはいしなだろうか。私はコップに手をのびし、触れる。私はそのコップにある固さとか冷たさとかを感じるのだが、その固さや冷たさといった感じはコップによってこの手にもたらされたものであり、私の手はたしかな能動のものとはいえない。この、能動と受動の混合が触覚の中の小さな事件のありさまであり、ここが、触覚だけが〈に〉という助詞を用いなければならないところではないかと思えるのである。

※₃ 坂部氏の言葉では、触覚は「ふれるものとふれられるものの相互介入、転位、交叉、ふれ合いといったような力動的な構造を示す」と言われているが、「言葉からもつとも遠い感覚」とか「もつとも原始的な感覚」とさげすまれ、深く考えられずにきたこの触覚は、見方を変えると感覚によって生きるわたしたちの具体的な生の謎を解く大事な鍵をにぎっているのかもしれない。

わたしたちは、対象によく触れようとするとき、それを撫ぜるといふことをする。なぜそうするのか。ここにも触れるという感覚行為の二重性があらわれる。触れるとは、ただ手をその対象に置くということとは違う。ただ手をその対象の上に置く（あるいはつける）ままにしておく、触の感覚は死んでしまうのだ。

触れるという感覚が生きるためには、その対象に触れると同時にそ

の触れている感覚を感じられなければならない。触れるという感覚は、対象に向かっていると同時に自分に、外に向かっていると同時に内に向かっている。この二重性の中で生きているのである。

D、わたしたちがあるものによく触れようとするとは、この二重の感覚をよく働かせて触れるということであり、そのためにはこの二重の内容を連続的に蘇生させ更新しなければならぬ。撫ぜるとはそのための必要の動作にちがいない。

コップに触れる。ある固さや冷たさを感じる。しかし、それはそのときの私の感覚のごく一部を言葉にしてみただけのことだ。私の感覚に詳しくなろうとすると、そんな言葉などほとんど役に立っていないことに気づく。形容詞をいろいろ思い浮べてみる。おそらく、どれほど言葉を並べてもその感覚を言い当てられない。まさに触感⁵は「言葉から遠い」のだ。

だからと言うべきなのだろうか、わたしたちは自分が感じているこの感覚をわがものにしようとする。内へ向かざるをえない。触れていながら、自分が感じている触感がどんなもののかを感じようとする。「その映画を見た」とことと「その映画に触れた」、E「その音楽を聞いた」とことと「その音楽に触れた」とことにはX違いがある。「触れた」と言うとき、わたしたちはそれを見たり聞いたりしながら自分の感覚を尋ねながら見たり聞いたりしていたのだ。

ある画家が「見るとは、目で触れることだ」と言ったが、深く関わることに、触れるという感覚との連繋^{れんけい}が強い。複雑で、言ってみればややこしい感覚だが、と言ってこの感覚を避けるとすると、わたしたち生命をもって生きる者にとって寂しいことになる。

(太田省吾『舞台の水』五柳書院より)

問四 — 線3「感覚行為の二重性」とありますが、これと同じ内容を表す語句を文中からさがし、八字で抜き出さない。

問五 — 線4「触の感覚は死んでしまう」とは、どのようなことをたえていますか。最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア 相手に感覚そのものを奪われるということ。
- イ 自分の感覚を自分で調整がきかなくなることを。
- ウ 対象をとらえることができなくなることを。
- エ 触覚というものがはたらかなくなることを。

問六 — 線2「言葉からもっとも遠い感覚」・線5「言葉から遠い」について、「言葉から遠い」の内容の違いを「2は…、5は…」と説明しなさい。

※1 坂部恵：哲学者。

※2 能動にもうものの場合：「能動」は自ら相手に働きかけること。「受動」は相手から働きかけられること。「対象」はその相手。

※3 相互嵌入：お互いの中にはめこむこと。

※4 蘇生：よみがえらせること。

問一 A E に入る適当な語を次の中からそれぞれ選び、記号で答えなさい。ただし同じ記号を二度用いてはいけません。

- ア たとえば
- イ つまり
- ウ しかし
- エ あるいは
- オ たしかに

問二 X に入る適当な語を文中からさがし、五字で抜き出さない。

問三 — 線1「力動的な構造」とありますが、その説明として、最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア 触れる人のその動作のみではなく、触れることと相手からの反応の両方によって成り立っている。
- イ 触れる人の一方的な行動に意味はなく、触れたことの反応に大きな意味を持っている。
- ウ 触れるということは私たちの具体的な生と深く結びついていて、触れた相手を感じ取る根本になっている。
- エ 触れるということは触れた相手からの反応があつて初めて成り立つものであり、この反応が感覚を呼び覚ましている。

問七 次の各文のうち、筆者の考えに合っているものには1を、合っていないものには2を、それぞれ解答欄に書きなさい。

ア 日本語の助詞の使用の違いにもあらわれているように、触覚には、他の四つの感覚と異なり、対象との相互関係によって成立する特徴がある。

イ 触覚は直接的に対象に触れる動作をするので二重性の特徴ははっきりしているが、他の四つの感覚においても対象との間には間接的に二重性が存在している。

ウ 触覚は触れる相手との関係の中で、自分の感覚を働かせて対象をとらえるものであるが、他の四つの感覚は対象からの刺激や情報を受け取るによってとらえるものである。

エ 「音楽に触れる」という表現は、音楽を聞く私たちの感覚が音楽を作ったもしくは奏でた人間の感覚と共鳴することによって成立し、その際私たちの感覚は制限をされる。

オ 私たちが撫ぜるといふ動作をするのは、撫ぜる相手をよりくわしく感じながら、その感じを確かめたり、あらたにしたるためである。

次の1～5の――線の漢字と同じ漢字をふくむものを、
次の中からそれぞれ選び、記号で答えなさい。

1 ゲンジュウな守り。

- ア 体力のゲンカイに挑む。
- イ 被害のゲンジョウに驚く。
- ウ 川のゲンリユウにたどり着く。
- エ 金額をゲンミツに計算する。

2 エイセイ的な施設。

- ア 災害へのジエイ方法。
- イ 店のエイギョウ時間。
- ウ エイキユウの平和。
- エ エイコクの大使。

3 ケンキユウ成果をまとめる。

- ア キユウユウと再会する。
- イ コキユウが乱れる。
- ウ 現場にキユウコウする。
- エ 原因をキユウメイする。

4 シンコクな問題が見つかる。

- ア シンヨウのおける人物。
- イ シンリン地帯の調査。
- ウ 久しぶりのジシン作。
- エ スイシンの計測。

5 カホウの刀。

- ア ホウイを調べる。
- イ ホウモツ館を見学する。
- ウ ホウサクを願う。
- エ 外国をホウモンする。

【国語】

解答用紙(中学第一回)

受験番号

氏名

得点

問一
A
B

問二
問三

問四
問五
問六

問七
問八

問一
A
B
C
D
E

問二
問三

問四
問五

問六

問七
ア
イ
ウ
エ
オ

1
2
3
4
5